
僕の中にある絵画。

一柳 紘哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の中にある絵画。

【Nコード】

N2905A

【作者名】

一柳 紘哉

【あらすじ】

いつもと同じ一日が始まるものだと思ったら思うようにはいかなくて唐突に「何か」にまきこまれその「何か」のなかで僕の絵画を見た僕は僕じゃなくなっていた。

僕は未完成の絵の上に立っていた。

色が書き殴つてあるだけで、絵と呼べるかはわからない絵の上に。
よく言えば印象派の絵。

そんな絵の上に立っていた。

この場所の空は塗りつぶしたように黒く、そのせいでどこまでも遠く
に天井があるようにも思えたし、又手を伸ばせば届いてしまうほどの
近くに天井があるようにも思えた。

そして、僕が立っているこの絵はアフリカの平原のように、どこまでも
つづいている。

絵の向こうにある地平線は、様々な色と、空の黒が喧嘩してぼやけて
見えた。

その絵の上に様々な、本当に様々な色が書きなぐつてある。

そして、この絵の様々な色は、どの絵画でもだせなかった色をして
いる。

たとえば赤。

炎の先端の微妙な色。

血が固まって黒ずんだ色。

夕焼けの色。

どれも赤。

たとえば青。

海のそこから空を見た色。

イルカの色。

まだ朝焼けに染まる前の色。

どれも青。

すべての色がともリアルに、鮮明に描かれていて、その色を見ただけで記憶の扉が音をたてて開いていく。ギーと歪んだ音で。

そして……思い出すんだ。

様々な記憶を。様々な思い出を。

僕の脳の思考回路はこんなシステムで成り立っている。

ファクトリーを必要としないで、乱暴に、しかし、繊細に、この絵に描き足されていく。

いつまでも終わらない絵は、本当にいつまでも終わらないかのように。

その中心に僕は立っている。

……なんで僕はここにいるんだ？。

この絵が僕の思考回路であるなら、この場所が僕の思考回路であるなら、僕はこの絵の上に立っているのは間違ってる。

僕の思考回路の上に僕が立っていることになるじゃないか。

おかしい。まるで夢の中にいるみたいだ。

夢？

そうさ夢だ。

ジリリリリ。

壊したい。

だれだってそうだ、朝はいつも目覚ましに憎しみを覚えるものだ。

勢いよくストップボタンを叩き、左手で何かを握りしめていることにきずく。

僕は握り締めているそれを目の前に持っていた。

ブラジャーだ。薄いピンク色のそれは、恐竜の骨のようにワイヤーが飛び出していた。僕はワイヤーが飛び出たブラなんてはじめて見たからゆっくりと眺めた。

しかし、別に面白いことはなかった。

博物館に飾られている本物の恐竜の骨よりは迫力も静けさも無かつたし、なにより趣きがかけていた。

ただの壊れたブラジャーだ。

さて、ならばどうしてブラは壊れたんだろう。

昨日の晩、かなり暴力的にミサの衣服を剥ぎ取ったせいかな、握り締めて寝ていたせいかな、

又は、ペンギンがブラの布を剥ぎ取って中のワイヤーで遊んでいたせいかな。

わからない。

けど、なんか理由なんてどうでもよかった。

現実性をもって壊れたブラが存在している。その理由なんか考えるほうが馬鹿らしい。

それに僕は起きたばかりで、あたかもうまく回っていない。まるで海の底の貝みたいだ。

ブラをベットの脇に放り、枕元にある煙草を一本取り出して吸った。二口程度吸って起き上がり、テーブルに残されていたミサの書置きを読んだ。

今日一限からだから先にします。

味噌汁作ったから朝ごはんにでも食べて。

あと冷蔵庫もう食材何も入ってないから、今日の晩御飯当番あなたよ。

P・S 今日ブラジャーを着けずにすごします。

セクシーでしょ。

P・S ブラジャー弁償。

読み終わった書置きをテーブルの上に放り、煙草を灰皿でもみ消してキッチンに向かう。

冷凍庫の中からカチンコチンに凍らせたご飯を取り出して、レンジ

にかけた。

流しで蛇口をひねり、あくまでも冷たくてどこまでも透明な水を出して、さっぱりと顔を洗った。

そして、一人暮らしの僕の家には不釣り合いなほどの大きさの食器棚からグラスを一つ取り出し、それになみなみと水を注いで一気に飲み干した。

流し台には洗われないお茶碗とお碗、それにグラスが放置してあった。

それらは芸術的に放置されていた。“洗われていない食器たち”そんなタイトルの絵があるみたいだ。

僕は持っていたグラスをその芸術的な食器の一員になるように置いた。

でも、失敗だった。僕の飲み終わったグラスをそこに置いたらあつたはずの芸術性は無くなってしまい、食器たちはただの汚れた食器になってしまった。

汚れた食器たちは捨てられた子犬のように僕を見つめているかのようで、いたたまれなくなった。

でも、めんどくさかった僕は、子犬達をを洗うこともしないで、味噌汁を温めなおした。

豆腐とネギとジャガイモの味噌汁をお碗によそい、チンして温まったご飯をその上によそった。

こんな日常を無視して、事件は唐突に起こる。

ある種の物事はいつも唐突に始まり、又、唐突に終わるものだ。

僕はなんていうのか唐突に始まるものに縁があつて、今回のようなことにしばしば巻き込まれては丸められたテッシュのように捨てられるとゆうことを何回も経験した。

今回も、いつもと変わらない朝は終わりの鐘がなり。

スコールのように唐突にはじまり、唐突に巻き込まれた。

はじまりは、

「性別不明の訪問者。」
ユニセックス

ピンポン。

グチャグチャに味噌汁とご飯をかき混ぜて、今まさに口に運ぼうと思った時に呼び鈴がなった。

無視して食べようとも思ったが、なぜか僕は呼び鈴のなるほうへはいはいと行ってしまった。

ドアの前に立ち、散らかった靴を足でどけて玄関ののぞき窓から覗いた。

外には大きなバックパックをしょった人が煙草を口にくわえて立っている。

チエーンを外さずに少しだけ扉を開けて、僕は言った。

「何かの勧誘ならいりませんよ」

「違います。」

高くも無く低くも無い声に違和感を覚える。

相手の顔を見て僕は一瞬息を飲んだ。不思議な印象を覚える顔立ち。整ってはいた。でも何かが違う。

惨殺シーンのようないけないものを見てしまったような気持ちが沸いてくる。

髪型、顔、耳、すべてのパーツが人間なんだけど人間じゃないような形で、明らかに異質だ。

そう。性別がまるで分からない。

服装と体系から判断しようと目線を下げる。

スタイルを強調するようにぴっちりとした服を着て（柄は英語で青くMILDとだけ書かれている）、ジーンズもタイトなものをはい

ている。

胸のふくらみは無かった。本当にまっただらだ。筋肉も僕と同じくらいついている。

男？

でも、腰はふくよかなカーブを描いている。

女？

僕の頭の中は今カオスの中心を走ってる。

その子は僕を不燃ごみのようなどうでもいいものを見るような目線で僕に話しかけた。

「どうしました？何かついてますか？」

「あつ。いやそうゆうのじゃなくて……」

僕がどう答えようか悩んでいたら、煙を勢いよく吐きながらその子が言った。

「あなたに用があつて来たのだけれども、途中でミサと名乗る子に会いました。

彼女に簡単に用件は伝えておきましたから、あなたは用意だけしておいてください。

持ち物は桃の缶詰と筆ですから。無いなら今すぐにも買いに出て下さい。

後、もしよかったら飴もらえないですか？

何か口にくわえていないと死んじやうんで」

「死ぬ？」

「はいそうゆう病気なんです。三年ぐらい前にニュースでよくやってたでしょう?」

「さあ、知らないな。」

ほんとにそんな病気があるの?」

「ありますよ。」

“リトマライズアンソルト症”と呼ばれてますね」

そうなんだ。大変ですね。

そうなんです。大変なんです。

ちよつと待つてて、探してくるから。そう言つて僕は飴を探しに部屋に戻ったかが、飴なんて買いおいていないことにきずき、変わりに煙草を持つてその子のもとに行つた。

チェーンを外し、勢いよくドアを開いた先にはもうその子の姿は消えていた。

後には、図書館の読書室のような静けさだけが残されていた。

僕は桃の缶詰と筆のことを考え、部屋に戻り味噌汁かけご飯を食べた。

冷めたそれは犬の餌のようだった。

そうして始まつた唐突は、勢いを増して暴風のように力を増す。

次は、

「どこかと繋がっている缶詰。」

僕は朝食を食べおえ、一息つくために煙草に火をつけた。

あの子はなんだったんだろう。
とりあえず、ひとつずつ整理していこう。

まずは、あの子の性別がわからない。本当に今でも。
そして、あの子は僕に用があるといってここに来た。

なぜか僕に言う用件を、僕ではなくミサに伝えたといっていた。
用件をミサに伝えたのなら、僕のうちにも来る必要は無いはずなのに、手間と時間を消費してきた。

桃缶と筆が必要だといっていた。

正直どうでもいいあの子の病気の話をした。

桃缶と筆？

何の関係があるのだ？

二つともセットでくくるにはあまりにもかけ離れた存在だろう。

煙草の灰が僕の思考に追いつけなくなったようにテーブルに落ちた。
ティッシュでテーブルを綺麗にして、ゴミ箱に放り投げ、あきらめた。
僕は桃の缶詰と筆を探した。

僕は誰かにこうしなさい、ああしなさいと言われたら黙って従うことにしている。そうすることでトラブルが少しでも少なくなるような気がするから。

又、僕の唐突に起こるトラブル達には、…従うしかない…とゆうことを理解しているから。

僕は煙草を口にくわえて、台所を隅々と缶詰と筆を探した。

筆はすぐに見つかった。なぜだかはわからないがフォークと一緒にしまわれていた。

缶詰は……アンチョビの缶詰しかなかった。

缶詰は缶詰だ。中身が桃かアンチョビだろうと関係はないはずだと思ひ、テーブルの上に並べた。

テーブルの上には食器、灰皿、缶詰、筆が乗っており、あまりに不恰好だ。

缶詰だけが汚されてなく綺麗で（筆は墨が固まっついていて黒ずんでい

る）可笑しさを際立てていたから、プルタブに指をかけて少しずつ力を加えて蓋を開けた。

そして僕は、掃除機に吸い込まれていくゴミやチリのように、缶詰に吸い込まれた。

力をつけた暴風はある場所に導かれる。

つづきまして

「絵画の世界で出会った獣。」

僕は缶詰に吸い込まれたあと、僕の部屋のベランダにいた。夜だった。星は見えない。

僕の部屋の中をのぞく。

そこはいつもと違った。二次元だった。

パソコンの画面やTVのブラウン管を見ているようだ。

いや違う。陰影が妙にはつきりしている。

そう、窓ガラス越しの僕の部屋は絵画だった。

ミサは裸婦画のようにぴくりとも動かないでベッドに横たわっている。

僕は。

そう、部屋の中に「僕」がいるのだ。

「僕」は、ベッドの脇で散らかった衣服の上に全裸でミサを見下ろしている。

ぴくりとも動かずに。

そんな絵画を僕は他人のようにいつまでも見た。絵が動いた。

正確には絵の中の「僕」だけが動いた。

「僕」は足元に散らばる衣服の中からブラジャーを拾い上げ。食いついた。

どんどん、ボロボロになっていく。

ミサはぴくりとも動かない。

「僕」はブラジャーを捕食している。

ミサは動かない。

捕食。

動かない。

「僕」がブラジャーを放り投げた。

ミサの顔に覆いかぶさった。

ブラジャーはワイヤーが飛び出ている。

ミサは…動かない。

ピシヤリとカーテンが閉まり絵画を見ることができなくなった。

僕は、涙が一滴だけ流れた。

唐突に終わる。

最後に、

「バイバイ。」

目覚めた？

嫌……違うのかもしれない。

とりあえず僕は意識を取り戻した。

なんだか、僕が僕じゃなくなったみたいだ。

テーブルの上には筆、缶詰、灰皿、食器が置かれている。

もちろん缶詰は空けられていて、中のアンチョビはしょっぱそうにこっちを見ている。

僕は、自分の顔が見たかったから、ぼうつとする頭を抱えて洗面台に向かった。

鏡には僕が望んだ姿はなかった。

鏡に映った僕は僕じゃなくなっていた。

僕しかきずかないほどの小さな変化かもしれない。

でも、僕はきずいた。

僕じゃなくなつた。

涙が勢いよくあふれた。

誰も止められない、隕石が落ちても、海が割れても、空が無くなつても。

僕は鏡の前で泣きつづけるだろう。

(後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2905a/>

僕の中にある絵画。

2011年1月26日09時19分発行